

一 次の文章は、家庭の都合によって芦屋に住む親戚の家に身を寄せることになった私が、その家の子であるミーナと過ごしている一場面である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

ミーナが私に対し、本当に心を開いてくれたのは、マッチ箱の箱を見せてくれた時からではなかったかと思う。もちろんそれ以前も私たちは仲良しだったが、少しずつ関係を密にしてゆく過程で、マッチ箱の箱が最終的な扉を開いてくれた気がする。その秘密を知っているのは、家族友人の中でたった一人私だけだった。あの壮大な芦屋の家に、小さな箱がひっそりと隠されていた事実を共有しているのは、私とミーナ、二人きりだったのだ。

「ねえ、これ、見る？」

ミーナの部屋で一緒に編み物をしている時、ふと彼女が手を止めて言った。

「もしよかったら、だけど」

いつもの菌切れのよい自信あふれる口調ではなく、^①妙に遠慮深かった。ミーナはベッドを壁際に向かってずるずると押しはじめた。あまりにも重そうだったので、私も手伝った。やがてベッドの下から無数の箱が姿を現した。

どれも両手に載るくらいの小ささだった。模様や形や材質はさまざまで、それらが積み重なってベッドの下をほとんど覆い尽くさんばかりになっていた。これまでもベッドに腰掛けたり寝転がったりして一緒に時間を過ごしたけれど、下にこんなものが隠れているとは気づきもしなかった。何度となくベッドは動かされたらしく、床には傷が残っていた。

石鹼^{せっけん}、レターセット、絆創膏^{ばんそうこう}、香水、チョコレート、ハンカチ、ボタン……。元々入っていたらしい中身もまたバラエティに富んでいた。その^(a)ヨウトに合わせ、当然形状も異なっていた。

A 高級な外国製品が入っていたに違いないと思わせるのもあれば、取っておいたところで何の役にも立ちそうにない粗末なものもある。しかしとにかく、どれもすべてが箱だった。

ミーナは不安げに私の反応をうかがっていた。何をたたえるべきなのだろうか。その数か、種類の多様さか、あるいは積み上げた全体の形か。私には判断できなかった。^(注1)ポチ子と初めて対面した時よりもずっと難しかった。

「どれでも一つ、開けてみていいよ」

ミーナが言った。特別な許可を、私一人のために出すような口ぶりだったので、これらが単なる空き箱でないことはすぐに分かった。

一番手前にある、赤い花柄模様のを一つ手に取った。キャンディーが何かが入っていたのだろう。真ん中に小さな貝殻がくっついていて、それを引っ張ると上蓋が持ち上がった。

キャンディーが入っていたことを思わせるものは何も残っていなかった。^(注2)パラフィン紙も、お菓子の由来を説明する葉^{しおり}も、甘い香りも。ただ底に一つ、マッチ箱が置かれていただけだった。いつもミーナが持ち歩いている、あの、ただのマッチ箱だ。

^②「もつと、ちゃんとよく見て」

一緒に箱の中を覗こうとしてミーナは息が掛かるほど近くに顔を寄せてきた。喉の奥を吹き抜ける風の気配がすぐそばでした。マッチ箱は底に糊付けされていた。中にマッチ棒が残っているらしく、揺るとがさが音がした。けれどそこは^③静かな空気に満たされていた。蓋を開けて覗き込んでも揺すっても決して乱されない、深海のような静けさだった。

私は以前、同級生の男の子に見せてもらった、昆虫採集の標本を思い出した。防腐剤を注射され、お菓子の箱にピンで留められたカブトムシやクマゼミやカミキリムシたち。あの箱も静かだった。揺するとやはり、外れた羽やひげがさが音を立てたけれど、彼らは自分たちが生きているのか死んでいるのか分からないままに、ただじっと息をひそめていた。マッチ箱もそんな昆虫たちのように見えた。

やがてすぐ、箱の内側に何か書かれているのに気づいた。最初は外側の花柄模様が中にも広がっているのかと思ったが、それは花ではなく言葉だった。蓋の裏から側面、底に至るまで、びっしり隙間なくミーナの字で、マッチ箱の物語が書き付けられている

のだった。

「ここにある箱全部に、マッチが入っているの？」

「うん」

「こうやって仕舞っておくと、湿気ないから？」

「ううん。湿気のこととは考えたことない」

「^(注3) 米田さんに見つからないため？」

「私がマッチ好きなのは皆知ってるから、別に隠す必要はないの。ねえ、それよりこれ見て。素晴らしいと思わない？」

私の質問はどれもこれも外的外れだったらしい。ミーナはもう待ちきれないというように、キャンディーの箱に納められたマッチを指差した。

新品ではないらしく、角は磨り減り、側薬にもこすった跡が残っていたが、黄色い地のラベルは色鮮やかだった。ラベルにはシーソーに乗った象の絵が描いてあった。宙を突き刺す牙を持った、立派な象だ。草原に設置されたシーソーは、B 子供が喜びそうな赤色のペンキで塗られ、実際シーソーに乗った子供たちは皆樂しげに足を揺らしている。もちろん、象が下で、子供たちは上だ。象は一人の子供を鼻で持ち上げ、空に掲げている。その子はオペラ歌手がアンコールの拍手を受けるかのように、得意満面で両手を広げている。子供の ^(b) ドウタイに巻き付く鼻には、ほそほそとまばらに毛が生えている。牙の付け根とお腹にはたるみが目立つ。もしかしたら、年老いた象なのかもしれない。象の頭の上には、(SAFETY MATCH) の文字。

「シーソー象よ」

ミーナは言った。

「シーソーに魅入られた象なんよ」

ミーナはキャンディーの箱に書かれたシーソー象の物語を ^(c) ロウドクしてくれた。

象は草原のシーソーで遊ぶ子供たちを、いつもうらやましそうに眺めていました。その単純だけれどスリルに富んだ動きにも、ギットン、バツタンという不思議な音の繰り返しも心を奪われていました。あんなふうに勢いよく上がったり下がったりできたら、どんなに気持ちがいいだろう。空に近づいたかと思ったら、地面に着地し、また空へ上ってゆく。きつと耳は軽快にバタバタとはためくだろう。

ある日象は勇気を出し、仲間に入れてもらえないかと子供たちに頼みました。草原の子供たちは皆優しくかったので、C 承知してくれました。

期待に胸をふくらませながら象はシーソーに乗りました。赤い板の上に四本の脚を置きました。思ったより窮屈ですが、大丈夫です。

ギットン、バツタンという音が聞こえてくるのを、空が近づいてくるのを、象は待ちました。息を止め、鼻を垂らして待ちました。しかし、何も起こりませんでした。

シーソーの向かい側で子供たちは、申し訳なさそうな、気の毒そうな、何とも言えない顔をしていました。少しでも象が持ち上がらないかと、懸命にお尻を踏ん張っている子もいましたが、1 でした。象は地面、子供たちは空。いくら待ってもそのままです。

象は悲しかったです。自分が乗った途端、凍りついたようにぴくりとも動かなくなってしまったのですから、原因は自分以外にないと悟りました。実際、そのとおりでした。足元に視線を落とし、地面にめり込んだ赤いシーソーを見つめ、⁽⁴⁾ 情けない気持ちで一杯になりました。

やがてブランコや砂場や鉄棒で遊んでいた子供たちが、様子を見にシーソーの周りに集まってきました。象は自慢の鼻を彼らに巻き付け、シーソーに乗せていきました。皆、歓声を上げます。興奮のあまり、ポーズを決めておどけて見せます。象の鼻に抱き

上げられるなど、滅多にできる経験ではありません。

一人、また一人とシーソーの上に子供が増えていきました。相変わらずシーソーは動く気配を見せません。窮屈になってきた子供たちは、できるかぎり身体を密着させ、下に落ちないよう互いの洋服の端を握り締めました。そうしている間にも次々と子供たちはシーソーに乗せられていきました。

D 彼らは不安になってきました。歓声を上げたりおどけたりする子はいなくなりました。空は自分の頭のすぐ上であり、反対に地面ははるか遠くにありました。木陰に隠れた子供を捕まえようと象が鼻をのぼす時、^⑤牙が上を向き、きりつと光りました。

下ろしてほしいと訴えるように、子供たちは足をぶらぶらさせます。今や自由に動かせるのは、宙に浮かんだ足だけです。シーソーは子供たちであふれ返り、息をするのも苦しいほどです。しかし象はあきらめません。ギットン、バツタンという音が聞こえてくるまで、子供たちをさらひ続けます。

もしどこかで赤いシーソーを見かけても、安易に近寄ってはけません。特に長い年月、片方が地面に食い込んだまま、動いた形跡の見られないシーソーには気をつけた方がいいでしょう。そこには象が乗っています。反対側には、身体を寄せ合い一塊になった子供たちが乗っています。彼らは宙に浮いたきり、二度と戻ってこられません。

「おしまい」

と言ってミーナは貝殻をつまみ、キャンディーの箱の蓋を閉じた。シーソー象のマッチ箱は再び暗がりの中に戻っていった。

ミーナが夢中になってマッチ箱を集めたのは、火を^(d)点すのが好きだったからではない。誰よりも上手に綺麗な火を点せるようになったのは、常にマッチ箱を手元に置いていた結果であって、元々^⑥そのことが目的ではなかった。ミーナが愛したのはマッ

チ箱に描かれた絵だった。

ミーナはマッチ箱を手に取り、その小ささを味わい、側葉のざらざらした感触や軸の触れ合う音や頭葉の可愛らしい丸みを楽しんだ後、ラベルの風景に隠された物語をすくい上げる。ラベルを描いた本人でさえ、あるいはマッチを擦る無数の人々の誰一人として、そんなところに何かが隠されているなどとは気づいてもいない。揺らめく炎の向こう側で、シーソー象にさらわれた子供たちが泣いているとは。

油断しているとすぐに使い捨てられ、踏み潰され、挙句の果てにはマッチで燃やされてしまうマッチ箱の秘密を守ろうとするかのように、ミーナはマッチ箱の箱を作り、内側に物語を書き付けた。

(小川洋子『ミーナの行進』による)

(注1) ポチ子……ミーナの家で飼われているコビトカバの名前。

(注2) パラフィン紙……耐水・耐湿性の高い包装紙。

(注3) 米田さん……ミーナの家のお手伝いさん。

問一 || (a) (d) の、カタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問二 **A** **D** にあてはまる言葉として、最も適当なものを選びなさい。ただし、同じものは二度以上使わないこと。

ア いかにも イ さぞかし ウ しだいに エ すぐさま

問三 — ①「妙に遠慮深かった。」とあるが、ミーナがそのようになっていた理由として最も適当なものを次の中から選びなさい。

- ア 秘密を共有する仲間として、私は適していないだろうと思っていたから。
- イ 私の好みが自分とは異なっていたら心を許してくれないと思っていたから。
- ウ 自分の大切な秘密に、私が理解を示してくれるのが分らなかったから。
- エ 誰にも教えられない秘密を私に教えてしまっただけ良かったから。

問四 — ②「『もつと、ちゃんとよう見て』とあるが、ミーナが見てほしかったものを、五字以上十字以内で具体的に答えなさい。

問五 — ③「静かな空気」とあるが、ここでのこの表現の説明として最も適当なものを次の中から選びなさい。

- ア ミーナに見られるのを待ち望みつつ、放置され続けているということ。
- イ マッチとしての使いみちが失われた状態で、長い間保管されているということ。
- ウ 一つ一つに個別な物語を有した、神秘の宝庫としての役割を担っているということ。
- エ 鑑賞用として貼り付けられていることを自覚して、ひたすら待ち続けているということ。

問六 《 1 》にあてはまる言葉として最も適当なものを次の中から選びなさい。

- ア 雀の涙 イ 柳に風 ウ 焼け石に水 エ 袋のねずみ

問七 — ④「情けない気持ち」とあるが、この時の象の気持ちを具体的に説明したものとして最も適当なものを次の中から選びなさい。

- ア 自分の重さによって、念願だったシーソー遊びができないという現実に落胆している。
- イ 体重を考慮しないで子供たちと同じように遊ぼうとした自分をふがいなく思っている。
- ウ 仲間に入れてくれた子供たちを楽しませてあげられないことを申し訳なく思っている。
- エ どんなに頑張ってもシーソーを動かすことはできないという事実在意気消沈している。

問八 — ⑤「牙が上を向き、きりっと光りました。」とあるが、この表現から読み取れることを四十字以上五十字以内で答えなさい。

問九 — ⑥「そのこと」とはどのことか。本文の語句を用いて答えなさい。

二

次の文章は、精神科医をしている著者が、自分の日常の経験をもとに述べたものである。この文章を、世の中にある様々な意見や考え方の一つとして捉え、後の問いに答えなさい。

「断念」を受け入れられない若者が、最近目立って増えている。中には、「断念しなくてもいい」といったメッセージを子どもに送っている親もいて、そのためにわが子が学校で問題を起こすことになっても、「悪いのは教師や学校だ」というふうに責め立てるくらいだから、なかなか「断念」できないのは当たり前とも言えるのだが。だが、全く「断念」しないでいられる人生などありえない以上、それに伴う悩みや葛藤を自分で引き受けられないと、どうなるか？ 少しでも「断念」せざるをえない状況に置かれたり、悩みや葛藤を抱えざるをえなくなったりすると、すぐに傷ついて、まいってしまふ、つまり、「打たれ弱い」子どもや若者のようになってしまふわけである。また、^①自分だけとんでもない目に遭っているという被害者意識を抱いて、すぐ他人を責めるようになる。この種の人々が増えているからこそ、一億総「他責的」社会になりつつあるのだ。あるいは、悩みや葛藤からできるだけ苦勞せずに解放されようとして、酒や薬物に頼り、あぐくの果てに、「依存症」に陥る場合も少なくない。このような問題に精神科医として日々接していて感じるのは、^②「断念」がときには必要だということだ——親自身がすることも、子どもにさせることも含めて。もちろん、これは、「悩みや葛藤を抱えていてこそ人並み」という意識がなければ、できない。「断念」には必ず悩みや葛藤がつきまとうのだから。

誤解を招かぬように付け加えておくが、筆者は「あきらめろ」とも、「夢を持つな」とも、言っているわけではない。人生において、とりわけ若いときには、夢に向かってあきらめないで頑張ることはとても大切だ。だが、「あきらめない」のであれば、当然、そのために重ねるべき努力も、あがくことに伴う苦悩も、失敗したときに味わう絶望も、引き受ける覚悟がなければならぬ。この覚悟がなく、自己愛的イメージだけがふくらんで、現実の自分との折り合いをつけられない人々が増えているからこそ、

(a) コマったことになる。

もし、それだけの覚悟を持ってないのであれば、ある時点で見きわめをつけて「あきらめること」＝「断念」を受け入れた方が生きやすい場合はいくらでもある。その意味で、ときには「断念」も必要だと言っているのである。精一杯努力しても、うまくいかないこともあれば、負けることもあるのだから——昔の人が、多少の慰めをこめて「勝負は時の運」と言ったように。また、「断念」によって自らの敗北や失敗といった「対象喪失」を受け入れてはじめて、敗者への思いやりや弱者への共感を持てるようになる。また、誇大妄想的ではない、地に足のついた目標を再度掲げて、それに向けての着実な努力というものもできるようになる。こうした「大人のふるまい」ができるようになるためにも、「断念」をいかに受け入れるかは、きわめて重要である。この断念の積み重ねによって、子どもは、「A」ということを学んでいくので、断念させるべきことは、断念させることが必要だ。だがもちろん、それには、重要な前提条件がある。子どもを無条件に愛してあげることだ。勉強ができて、できなくても、親の言いつけをよくきくいい子であろうと、なかろうと、存在として認めてあげる、つまり、子どもを全体対象として認識することが必要である。この前提条件を忘れて、断念ばかりを強ければ、虐待に近いことになってしまう。

最近の親子関係を見ていて感じるのは、^③この二つが逆になっていることだ。「何でも受け入れてあげなさい」といった助言やマニュアルが主流になっているせいか、子どもを甘やかし、断念させない一方で、「勉強ができたなら愛してあげる」「いい子にしていたら愛してあげる」といった条件付きの愛しか抱けない親が多い。その典型が、「有名中学校に合格する子は、そうでない子よりもかわいいと思っている」ような親である。こういう親は、良い子＝良い対象しか愛せない、つまり、子どもをB対象としてしか認識できないわけで、これも成熟拒否の典型的なシチュエーションを示していると言える。おまけに、「勉強さえできたら、他のことはどうでもいい。他の子を傷つけてもかまわない」「成績が上がったら、ごほうびに何でも買ってあげる」といったメッセージを送りがちなので、子どもは、世の中には断念しなければならぬものがあることがわからぬまま、成長していくことになる。断念は辛いもので、誰だつてできるだけ避けたい。また、死という究極の対象喪失に出会う機会が減ったために対象喪失

に対する免疫ができにくくなったのは事実だ。さらに、消費社会の中で「誰にでも無限の可能性がある」という幻想がふくらんだことによって、断念が昔に比べてできにくくなったのもたしかである。当然の結果として、なかなか断念できない人々が増えたわけだが、断念によって悩みや葛藤を抱え、それに伴う痛みや不快感とも向き合うという体験を積み重ねておかないと、いざ転んだとき、二度と立ち上がれなくなる。転ぶのは仕方ない。人生には運もあるのだから。だが、転んで起き上がれないと、取り返しのつかないことになる。このことを肝に銘じておくべきである。

それでは、転んでも起き上がることができるようになるためには、どうすればよいのか？ 転んで起き上がる体験を積み重ねるしかない——失敗したとき、どうやって克服し、乗り越えていけばいいのかを、身をもって体験するために。④子どもが失敗することへの親の不安が強いために、過保護・過干渉になっている場合が少なくないが、これでは、転んだときどう起き上がったらいいかわからぬまま、年だけ取ることになる。

しかも、転んでも起き上がる、あるいは失敗から学ぶ体験を積み重ねるのは、早いほうがいい。若ければ、若いほど、やり直しがきくからだ。その意味では、反抗期も早く出現した方が望ましい。以前、総合病院の神経科に勤務していた頃、摂食障害の女の子やひきこもりで家庭内暴力を振るうようになった男の子を入院させて治療していたのだが、お母さんから生育歴をうかがうと、「子どもの頃は、親の言うことをよく聞くいい子だった」「(幼児期、思春期の)反抗期がなかった」という場合が多かった。「親の言うことをよく聞く」のは、親の欲望をくみ取って、それに合わせているからである。その結果、親の^(c)アヤツリ人形のようになり、自らの欲望を持てなくなることもある。このような場合、当然、反抗期もないわけだが、こうして抑圧していたものは、後になって必ず出てくる——摂食障害、家庭内暴力、あるいは不登校や出社拒否の形で。しかも、後になって出てくるほど、治療がやっかいなので、幼児期の問題は幼児期に、思春期の問題は思春期のうちに、かたをつけるべきだとつくづく思う。反抗期のない子どもが増えているということは、最近よく耳にする。親の側の抑圧が強いのか、それとも、子どもの^(c)C志向が弱いのか、さだかではないが、いずれにせよ、就職後に出社拒否からひきこもりになり、場合によっては親に暴力を振るうような若者が

増えているのは、遅れて出てきた反抗期ではないかという気がする。

(片田珠美『一億総ガキ社会』による)

問一 〓(a) 〓(c) のカタカナにあたる漢字の、部首名と総画数とを答えなさい。

問二 ①「自分だけとんでもない目に遭っているという被害者意識を抱いて、すぐ他人を責めるようになる。」とあるが、「断念」できない人が「すぐ他人を責めるようになる」のはなぜか。本文全体を踏まえて、四十字以上五十字以内で答えなさい。

問三 ②『断念』がときには必要だということだ」とあるが、「断念」することで身につくこととは何か。八字程度で二つ答えなさい。

問四 A にあてはまる言葉として最も適当なものを次の中から選びなさい。

A だめなものだめ

イ 明日は明日の風が吹く

ウ 因果応報

エ 七転び八起き

問五 ③「この二つ」とあるが、「二つ」とは何と何か。本文の語句から抜き出して答えなさい。

問六

☐ B

にあてはまる言葉として最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア 同一 イ 部分 ウ 共感 エ 拒否

問七

——④「子どもが失敗することへの親の不安が強いために、過保護・過干渉になっている場合が少なくないが、これでは、転んだときどう起き上がったらいいかわからぬまま、年だけ取ることになる。」とあるが、「過保護・過干渉になっている」親に育てられると、子どもが「転んだときどう起き上がった」てよいかわからないまま「年だけ取」ってしまうのはなぜか。本文全体を踏まえて、四十字以上五十字以内で答えなさい。

問八

☐ C

にあてはまる漢字二字の言葉を自分で考えて答えなさい。

